

## 時の贈り物 [第111回 与謝野町の地名2 神社と地名 ～アツエに関して～]

地名は、ある場所を情

報記号として多数者が共有する共有知識です。それは「みんなが知っているモノ」であることが前提と思われれます。そのモノとは、移動・変化しにくく、例えば、地形・鉱物・樹木などその土地を象徴する「シンボリックなモノ」です。また、人々は安定・安心な暮らしを求め、この普遍的な人間心理を支える信仰の存在の場所、つまり、神社も地名化する条件を備えていると推定されます。

そこで、アチエの地名由来を探ると、温江の小事「湯ノ谷」の阿知江神社に関する可能性が濃厚です。湯ノ谷は温江地区の南端に位置する狭い谷地形の土地です。ユノタニ・イノタニと言われますが、イマエという地名が隣接しますので、イノタニが正解と推察されません。阿知江神社は、明治14年に大虫神社に合祀されましたが、今でも伝・

阿知江

神社が

ありま

す。温

江の地

名由来

が湯ノ

谷の阿

知江神

社だと

すると、

大きな

謎が生

じます。その謎とは、温

江地区の南端にある狭い

谷に鎮座した阿知江神社

がその何倍も広い温江の

代名詞となったというこ

とです。平安時代に、与

謝郡を代表する高い社格

の名神大社とされた、温

江の「大虫神社・小虫神

社」に由来する地名なら

理解できるのですが、そ

うではないのです。そこ

には今に伝承されなかつ

た湯ノ谷の土地が秘めた

「あるモノ」があったの

でしょうか。

(与謝野町教育委員会)



温江の遠望(湯ノ谷を中心に)

## 時の贈り物 [第113回 【与謝野町の地名3】地名と神社～「カヤ」に関して～]

地名は、特定の場所について多数者が共有する情報記号で、地域社会の生活レベルの共有知識です。地名の語源は起承転結のある創作文学作品ではなく、庶民が知っているシンプルな事象と思われるです。その一つが神社の地名化です。今回は「加悦か悦や」の地名由来を探ってみます。地名論の大原則は「漢字で考えない。読みで考える」です。ただ、漢字は無視すべきという意味ではありません。表記漢字は2次的に参考にするデータとお考えください。

今のところ、地名「カヤ」を表現した古文書の初出は鎌倉時代のもので、加悦の語源説で有力視されているのは、天満神社が鎮座する天神山の奥にある「吾野神社」のおよびその祭神「我野廼姫」に由来する説です。



昔は「カヤの山」だったのかもしれない

難読漢字ですが、吾野は「アガノ」、我野廼は「ワカヤノ」と読まれています。また、吾野神社は平安時代の延長5年（927年）に公表されたとされる『延喜式神名帳えんぎしきじんみょうちょう』に記されており、「ワカノノ」と読んでいたようです。これらを解析すると、ワは尊称、ノはつなぎの格助詞ですので、意味があるのは「カヤ」「カノ」の部分になります。

では、カヤ・カノとは何か？奈良時代の書物「古事記・日本書紀」には自然神「野の神」として「カヤノ姫」が登場します。どうやら地名「加悦」は、この野の神「カヤの姫」に由来すると考えることが妥当と推察されます。吾野神社は古代の神社で、天満神社より古いのです。つまりその昔、当地の人々がこの辺りを称する時に「カヤ姫のいる地域」と認識していたと推察されます。

神社・祭神は地域のシンボルであり、多くの人に共有された地域情報であったと考えれば合点がいきます。

（与謝野町教育委員会）

三河内郷土資料室に収蔵している昔の生活道具を紹介いたします。

皆さんのご家庭にある洗濯機はどんな形でしょう。縦型？ ドラム式？ 乾燥機能付きのものもあれば、昔ながらの二層式洗濯機を使っておられるお宅もあるでしょう。いずれも共通しているのは「電気」を使う洗濯機ということです。

では、電気を使わない洗濯機となると、たらいに洗濯板でしょうか。実は電気を使わない「手回し式洗濯機」もありました。

写真は、昭和30年代に発売された「カモメホーム洗濯機」です。使い方は球体の洗濯槽に洗濯物と洗剤を入れ、お水でなくお湯を入れハンドルを回します。蓋にはパッキンが付いてお



カモメホーム洗濯機

り、密閉された洗濯槽内部の空気が回転とともにお湯で膨張し、気圧が高くなります。その圧力によって洗剤とお湯が繊維の内部まで染み込み汚れを分解する仕組みです。蓋を開けると一気に内圧が下がって真空状態になり、附着した汚れ成分をさらにはぎ取ります。すすぎはお湯を入れ替えて回転させます。

昭和30年代には初期の電気洗濯機がすでに発売されていましたが、たいへん高価で、各家庭に電気コンセントも少なかったことから、汚れが落ちて電気も使わない、省スペースの洗濯機は重宝したそうです。

三河内郷土資料室には、さまざまな昔の生活道具を収蔵しています。直接触れて楽しむことができますので、ぜひお越しください。

## 《三河内郷土資料室》

入室料 一般150円

(中学生以下無料)

開館日 土・日曜日

(年末年始を除く)

(与謝野町教育委員会)

三河内郷土資料室に収蔵している昔の生活道具を紹介いたします。

皆さんのご家庭にもアイロンがあると思います。洗濯した衣服やしまい込んでいたものなどに当てて、熱と重みと蒸気とで繊維を伸ばすわけですが、熱や蒸気を生む電気がなかったころはどうしていたのでしょうか。

写真は「火のし」

と呼ばれるものです。どれも炭火を中に入れて使います。写真右端の片手鍋状のものが最も古く、平安時代に編さんされた辞書『倭名類聚抄』には「火熨斗」の記載があり、貴族の邸宅などで使われていたといえます。柄を手に持って平らになっている鍋の底の部分を衣類に当てて、鍋自体の重みと熱とで押し伸ばすようにして使いました。冬には寝る前に布団を温めるといった使い方もされたようです。



さまざまな「火のし」

当然ながら電気アイロンと違って温度の調節はできないので、底が熱くなり過ぎたり爆ぜた火が外に飛んだりして、衣類を傷めてしまうこともありました。写真中央のものは蓋や中敷きが付き、先が尖っているので細部を伸ばすことができます。

明治時代には現代のアイロンに似た形状をした左端の炭火式アイロン「西洋火のし」が輸入されるようになりました。内部のガスを逃がす煙突が付いているのが特徴です。

三河内郷土資料室には、さまざまな昔の生活道具を収蔵しています。直接触れて楽しむことができますので、ぜひお越しください。

《三河内郷土資料室》

入室料 一般150円

(中学生以下無料)

開館日 土・日曜日

(年末年始を除く)

(写謝野町教育委員会)

三河内郷土資料室に收藏している昔の生活道具を紹介いたします。

皆さんは就寝の際にどのような枕をお使いでしょうか。そばがら枕や低反発素材など、頭に優しいさまざまな素材の枕がありますが、エアコンも扇風機もなかった昔の熱帯夜には、枕でも涼を取ることが求められました。

写真は陶器の枕で「陶枕(とうちん)」と呼ばれ、頭でなく首の後ろに当てる使用です。中は中空で首を乗せる部分には穴がいくつも開いており、中にお香を入れたりもできます。頭が浮くので汗ばむ顔や髪に張り付かないだけでなく、陶器のひんやりした感触で首の動脈を冷やす効果もあります。

固い陶器の枕に慣れるのは大変ですが、当てるみると実に涼しいものです。また底部が弓なりになっていて横に揺れるので、意外に思われるでしょうが多少の寝返りでは頭が転げ落ちないようになっています。

俳句で夏の季語にもなっています。

いる陶 陶枕手前が空冷式健康陶枕



匠が楽しまれてきました。写真手前のものは昭和初期の日本製で、底面に「空冷式健康陶枕」と記されています。側面にびっしり設けられた溝は、外気に触れる表面積を増やし、移った体の熱がこもりにくい造りになっています。

三河内郷土資料室では、さまざまな昔の道具に直接触れて楽しむことができます。ぜひお越しください。

《三河内郷土資料室》

入室料 一般150円

(中学生以下無料)

開館日 土・日曜日

(年末年始を除く)

(与謝野町教育委員会)

## 時の贈り物 [第117回 ノー電気生活 ～脱穀あれこれ～]

三河内郷土資料室に收藏している昔の農道具を紹介します。

刈り取った稲穂を脱穀する器具として「千歯こき（写真左）」があります。江戸時代の元禄年間（1688～1704年）に考案されたといわれ、乾燥させた稲穂を上部にくし状に並んだ歯の隙間に入れて引き抜くことで一気に粉が取れます。それまで「こきばし」と呼ばれる竹の棒で行われていた脱穀作業の効率画期的に向上しました。



千歯こき

千歯こきが大きく形を変えないまま200年以上活躍した後、明治時代の終わりころ、新たに足踏み式の回転脱穀機（写真右下）が登場。大小の歯車とクランクを活用した脱穀機は、現在もペダルを踏むと非常に勢い良く回ります。円筒部分に稲穂を押し付けることで、表面に張り巡らされ

たU字型の針金が粉をこそげ落とします。



足踏み式回転脱穀機

この回転機構にペダルの代わりにモーターをつなぐことで脱穀機は動力化の時代を迎えます。現在はコンバインに組み込まれ、刈り入れと同時に脱穀ができるものもあります。

三河内郷土資料室では、紹介した回転脱穀機を実際に踏んでみたり、さまざまな昔の道具を実際に触れて楽しむことができます。お子さんと一緒にお越しください。

《三河内郷土資料室》

入室料 一般150円

（中学生以下無料）

開館日 土・日曜日

（年末年始を除く）

（与謝野町教育委員会）

三河内郷土資料室に収蔵している昔の道具を紹介し  
ます。

皆さんは石臼いすを回したことが  
ありますか？ 写真のよう  
に石臼は円筒形の同じ大きさ  
の石が対になっています。下  
の石を固定臼、把手のついた  
上の石を回転臼といいます。  
それぞれの接触面には凹凸が  
刻まれており、回転臼の穴を  
抜け落ちた穀物等が接触面  
で回転によってすりつぶされて  
粉になり、隙間からこぼれ出  
てきます。

電気もスーパーマーケット  
もなかった昔には、穀物だけ  
でなく木の実や根菜といった  
さまざまな食物を、各家庭の  
石臼でひいて調理に使用しま  
した。きな粉は煎った大豆を粉  
にしますが、生の大豆をひく  
と大豆粉になります。ただ実  
際にやってみると、同じ大豆  
であっても生の大豆は粉にな  
る前に隙間からこぼれ出てし  
まい、きな粉と同じようには  
ひくことができないことがわ  
かります。豆、米、小麦、大麦、  
そば、とうもろこし、どんぐ



合わせる面に凹凸の溝が刻まれた石臼

りなど、材料やその状態ごと  
にひき方にコツがあり、各家  
庭で脈々と伝え継がれてきた  
のでしょうか。

三河内郷土資料室では、紹  
介の石臼を実際に回してきな  
粉づくりが体験できるほか、  
さまざまな昔の道具に触れて  
楽しむことができますので、  
ぜひお越しください。

## 《三河内郷土資料室》

■ 入室料 一般150円

(中学生以下無料)

■ 開館日 土・日曜日

(年末年始を除く)

与謝野町教育委員会

ちりめん街道にある「旧尾藤家住宅」の蔵に残されていたさまざまな絵画の中から干支にちなんで、江戸時代の京都で活躍した画家岸駒の京都市で活躍した画家岸駒（1749〜1839）が描いた六曲屏風「咆虎図」を紹介いたします。

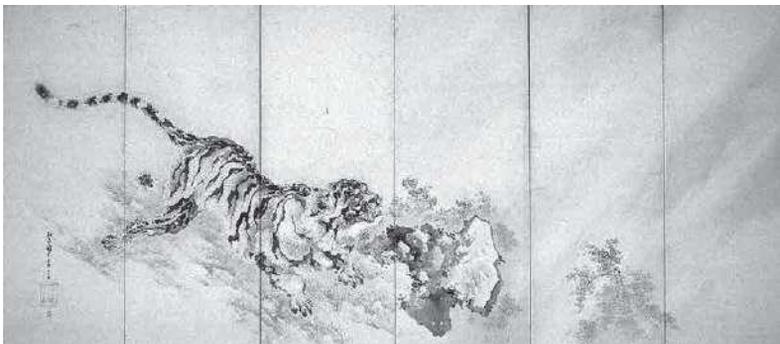
岸駒は、岸派の創始者となった画家で虎を得意とし、岸駒以降、虎図は岸派代々のお家芸とされました。本図は、雲間から顔を出す龍を描く「雲龍図」と対になり六曲一双向って左半分を構成します。雲龍図には、天保9年（1839）の年紀と「九十翁」の記述があり、最晩年においても龍虎の大作を手がけたことがわかります。

龍に向って口を大きく開き咆え声をあげる虎は、後肢や尾が中空に伸び切っており、今まさに岩山を駆け抜けているところと見えます。墨の濃淡を活かした筆遣いが力強く、荒々しさを表現しながら左足裏の肉球をのぞかせているところにお

かしみも感じさせ、咆えれば風を生み山を駆け抜ける勢い増すと云われた虎の躍動感を描き出しています。

岸駒の虎の襖絵は、江山文庫で開催中の屏風を特集した企画展でご覧いただけます。

（与謝野町教育委員会）



岸駒筆「咆虎図」  
天保9年（1839）  
紙本墨画 六曲屏風

江山文庫企画展「屏風あれこれ」新収蔵屏風とともに「蘭亭曲水図」を紹介いたします。

作者の松川龍椿は、江戸時代後期の四条派の画家です。生没年は不明ですが、丹後に滞在したと伝えられ、各地に作品が残されています。中国の故事にちなみ曲水の宴の様子を描いています。曲水の宴とは、蛇行する川に酒を満たした杯を浮かべて流し、杯が

自分の前を過ぎる前に詩歌を即興で詠み、できなければ杯の酒を飲み干す遊びです。日本でも奈良時代には春の恒例行事として定着し、宮中や貴族たちの邸宅で催されました。俳句では晩春の季語になっています。

桃の花が咲く水辺で、人々がさまざまな姿で詩作にふけています。寝転んだまま筆を取ったり歓談したり、酔って童子に支えられてやっと歩いたり。中



松川龍椿筆「蘭亭曲水図」(部分) 紙本墨画淡彩 六曲一双屏風

には興が乗ってきたのか、岩に向かつて筆をふるう人なども。戯画化された人物一人ひとりの表情がおかしみを誘います。

蘭亭曲水図は、風雅な文人の営みに憧れる人々の理想郷として、多く描かれた画題です。本町ゆかりの与謝蕪村も51歳のときに、蘭亭曲水図屏風を描いています。

(与謝野町教育委員会)